

クラス		受験番号	
出席番号		氏名	

#2 高1
国語

二〇一四年度
第二回 全統高一模試問題

国語 (八〇分)

二〇一四年八月実施

試験開始の合図があるまで、この「問題」冊子を開かず、左記の注意事項をよく読むこと。

注意事項

- 一、この「問題」冊子は、30ページである。
- 二、解答用紙は別冊子になっている。(受験届・解答用紙)冊子表紙の注意事項を熟読すること。
- 三、本冊子に脱落や印刷不鮮明の箇所及び解答用紙の汚れ等があれば試験監督者に申し出ること。
- 四、解答選択型は、二通りある。□□□は共通問題、□□□□は選択問題である。□□と□□のうち、どちらか二題を選択して解答すること。(選択パターン以外で解答した場合は、解答のすべてを無効とする場合がある。)

選択型 コード	選 択 型	問 題 番 号
1	現代文・古文・漢文型	□□□□□□□□
2	現代文・古文型	□□□□□□□□

- 五、試験開始の合図で「受験届・解答用紙」冊子の国語の解答用紙を切り離し、所定欄に「選択型」、「氏名(漢字及びフリガナ)」、「在学高校名」、「クラス名」、「出席番号」、「受験番号(受験票発行の場合のみ)」を明確に記入すること。
- 六、試験終了の合図で右記五、の□□の箇所を再度確認すること。
- 七、答案は試験監督者の指示に従って提出すること。

【共通】

次の文章を読んで、後の問に答えよ。（配点 六十点）

一九五九年、C・P・スノーは「二つの文化と科学革命」と題する論説において、科学的文化と人文的文化の隔絶と対立が文化そのものの進歩だけでなく、正常な社会の進歩をもソガイ^aしていることを指摘し、教育制度の抜本的な改革を断行すべきであると提案した。彼は、特にイギリスにおける伝統的な教育システムが特権階級の維持のためのものであり、科学の役割の重要性を深く認識せず、人文的文化に偏っていることに異議申し立てを行ったのである。ケンブリッジ大学で物理学を学んでフェローになり、その後政治家にテンシン^bしたスノーであればこそ、二つの文化にA¹することの重要性を深く認識していたのだろう。

以来、五〇年の歳月が経ったが、彼の指摘は依然として有効であるばかりか、事態はいつそう悪化しているかもしれない。例えば日本において、政治家や官僚のほとんどは文系出身者が占めている。かれらは科学の詳細を知らないまま巨額の科学技術予算を牛耳^{ぎゅじ}っているのである。科学者は文系の人間の科学に関する無知を嗤^{わら}い、文系の人は科学は苦手だと言いつつ居直^かっている。そのまま両者の間の対話も途絶えたままである。科学技術がますます社会に大きな影響を与えている現代であるにも拘わらず、科学的文化と人文的文化の分断はいっそう深化しているのだ。

それへの反省もあって、大学において文理融合とか文理連携が言われるようになり、教養学部や人間科学部などの新学部が設立されて久しい。また、理系・文系双方の成果を学べるリベラルアーツの重要性を指摘する識者も多い。とはいえ、文系と理系の人間の協働によって視野の広い人材を養成することが期待されているにも拘わらず、その実^じは上がっていない。それぞれ自分が専門とする分野の研究に忙しく、分野を越える研究は学界における評価も低いため、知はつながらないままなのである。

A¹ ニュートン（一六四二―一七二七）は運動の法則と万有引力の発見で力学理論を完成させた科学者（自然哲学者と言うべき）であるが、晩年には錬金術と神の存在証明に凝^こったことで知られている。錬金術は天と人間の間の照合という信念の下での当時

の「科学」ではあったが、やがてすっぱり錬金術を捨てて造幣局の長官になった。おそらく錬金術が二セの科学であることに気づき、現実世界の二セ金作りの摘発に挑んだのだろう。聖書の予言を信じて神の存在証明に勤しんだのは自然魔術の影響を受けた名残^{なごり}であったと言える。主観的には、人文的文化から独立した科学の立場から信仰の問題にまで橋を架けようとしたのかもしれない。科学の黎明期^{れいめい}においては、個人の内部で魔術と科学と信仰はつながっていたのであろう。

少し時代が下って、ダランベール（二七二七—一七八三）を採り上げてみよう。彼は、神学・医学・法律を学び、弁護士になった後に数学・物理学を研究した。

それを受け継ぐかのように文系知と理系知の合一を體現したのがゲーテ^B（二四九—一八三二）であった。『若きウェルテルの悩み』や『ファウスト』などの文学活動の方が著名であるが、解剖・地質・鉱物・動植物などの研究を行ったことも知られている。ゲーテは文理融合を個人として全うした最後の人であったと言え^Iばかもしれない。

以上三人だけを挙げたが、一八—一九世紀において文系知にも理系知にも^Bであった人物は枚挙に^I遑がない。この時代は分断されていない知を個人の内部でつないできたことがわかる。キーワードは博物学的な総合知ではないだろうか。

おそらく、文理の知の分断が開始された直接の契機は産業革命であろう。まずニューコメンやワットによって機械技術の卓越性が発揮され、続いて技術の原理を明らかにする科学理論（熱力学）の有効性が認識された。科学・技術が自然を相手に神を読み解く行為から、具体的に生活と密着し、生活に役立つ知識として自立し始めたためである。人文学的な知の世界とは独立した科学知が広がったのだ。産業革命は、工業化と生産システムの革命に止まらず、知の分断をもたらした根源なのである。

以後は、一瀉千里^{いっせや}であった。分析的手法の優位性が示されるや博物学^Cに別れを告げ、専門分化が全分野に及んだ。物心二元論が貫徹され、物質は科学的文化、精神は人文的文化と、役割分担が明確になった。そして欲望^{けんいん}に牽引されて、物質の世界ばかりが肥大化していった。また、個人のレベルでは文系か理系かを選ばざるを得なくなってしまった。

となれば、人間関係を通しての文理交流を行うしかない。その代表例を夏目漱石^Cと寺田寅彦^{とらひこ}の結び付きに見ることができ^Iるだろう。文系知の代表とも言える夏目漱石は科学にも^Cが深かったが、それを常に刺激したのは寺田寅彦であった。

『X』に使われた数々の科学に関わる話題は寅彦から教わったものだが、それを簡単に自家菜籠中のものとするこ

II じかやくろうちゅう

きたところに漱石の視点の幅広さを窺^{うかが}うことができる。逆に、寅彦は人生の読み方を漱石から学び尽くしたと思われる。寅彦のエッセイのシニカルな部分は、漱石の時代を読む目を意識したためではないだろうか。まだ科学の対象が等身大であった時代であればこそ可能であったのかもしれないが、二人の交流を通しての文理の融合が可能であったのだ。

二一世紀は文理が再びつながる時代、というよりつながらねばやっていけない時代となるのではないかと考えている。科学がいつそう発達したが故に、人間を置いてきばりにしてきた側面が社会や文化に重くのしかかってきているからだ。例えば、遺伝子操作による人間の改造や脳科学に基づいての人間の操作などが具体的に展開されようとしている現代において、科学は人間にとっていかなるものであるべきかを問いかける作業を欠かすことができない。遺伝子や脳という物質としての人間の操作が、人間の尊厳や価値についての哲学的な考察を抜きにして、一体何をもたらすのであろうか。人間の品種改良？ 肉体による人間の差別？ 新しい優生学^⑤？ 現代の私たちなら、まだそれらを空しい所業とか反倫理と考えるのだが、それらが行き渡るような時代にになれば果たして同じように考えるだろうか。人々はある状況に慣れ親しんでしまうと、自らの異常さに気づかなくなるものなのである。

環境を破壊してもなお追い求める豊かさへの願望、プライバシーまで侵害されつつもなお便利さを追求するデジタル信仰など、数多くの科学に深く関わりながら、しかし科学のみでは解き得ない数多くの問題群が堆積^{たいせき}している。これらをトランス・サイエンス問題と呼ぶそうだが、科学を超えて考えるべき課題を解きほぐすのは、人間の可能性や尊厳に関する深い洞察ではないだろうか。それらと科学の歩みが歩調を合わせなければ人間の持続可能性そのものが危険になってしまいうだろう、そのような時代が来ていると考えるべきなのである。その意味で、文理が再びつながる時代が来ていると言えるのではないだろうか。

しかしながら、いったん途切れた文と理の結び付きは容易に回復しそうにない。分析的手法で狭い領域に知的関心を閉じ込めてきた理系的な知と、あたかもそれに反撥^{はんぱつ}するかのようにとりとめもなく分散的に広がってしまった文系的な知の間に橋を架けることは困難であるからだ。単純に言えば、普遍的な真理の存在を信じてそれを追究する理系知に対し、普遍的な真理の存在を

否定して何らの **D** のない世界を理想とする文系知、そこに共通する要素は何も見出せないと考えざるを得ないからだ。「文理融合」とか「文理連携」とかの看板が掲げられながら、ほとんど惨憺^{さんたん}たる結果しか得られていないのが現状である。

おそらく、必要とされるのは焦らないことだろう。文と理は興味も関心も異なり、何が重要であるかの視点が違い、そもそも使う言葉すら通じ合わない現在において、ただ会話することだけでも大きな意味がある。そこで、少しでも共通する言葉があることに驚き、同じ場面を異なった視点で見ていることに気づき、思いがけない出会いの場が存在するという発見を経験する。まだそれから何ものが生まれることはなくても、語りを積み重ねる楽しみができれば最高なのではないか。むろん、最初は文理の対話に向けて強制力を働かせねばならない。自然発生を待っているのは、何事も始まらないからだ。意識的な **E** を準備する中で、互いの理解を深めていくことなのだろう。

私は、「文理の対話」から始まり、ある共通の作品を「文理協業」によって製作することを目標とすればどうかと思う。その種はゴマンとある。先に述べた遺伝子操作・脳の制御などから、原発の行く末・デジタル社会と個人の相克^{そうごく}・地球温暖化問題などもあるだろう。それらは極めて理系的な問題提起だとすれば、ポストモダンの^(注)コウザイ・国民国家とグローバルイズム・経済至上主義の国際情勢・自由主義と伝統主義の葛藤など文系的な問題の掘り起こしも多くある。これらは浅学^{せんがく}菲才^{ひさい}の私が思いついたことに過ぎない。どのような話題を対話の主題にすべきかの対話から始めて文と理が言葉を交し合う、とりあえずそこから始めてみようではないか。

(池内^{いけうち}了『現代科学の歩きかた』)

(注) ○フェロー……研究職。

○シニカル……皮肉な態度をとるさま。冷笑的。

○優生学……人類の遺伝的素質を改善することで人類の進歩を促そうとする科学的社會改良運動。そうした思想の危険性が問題となることが多い。

○ポストモダン……モダン(＝近代)を乗り越えようとするありかた。

問一 傍線部 a ～ c のカタカナを漢字に改めよ（楷書で正確に書くこと）。

問二 空欄 A 〃 E に入れるのに最も適当な語を、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。ただし、同じものを繰り返し用いてはならない。

ア 造詣 イ 邂逅^{かいこう} ウ 通曉 エ 堪能 オ 桎梏^{しっこく}

問三 空欄 X には、夏目漱石が初めて雑誌に発表した小説の題名が入る。その題名を次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 坊っちゃん イ 三四郎 ウ こころ エ 吾輩は猫である オ 道草

問四 傍線部Ⅰ・Ⅱの意味として最も適当なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

Ⅰ 枚挙に遑がない

- | | |
|---|-------------|
| ア | 少なくはない |
| イ | 他にも存在する |
| ウ | たくさんありすぎる |
| エ | いちいちを取り上げない |
| オ | 探せばないことはない |

Ⅱ 自家薬籠中のもの

- | | |
|---|-------------|
| ア | 自分だけのもの |
| イ | 十分に役立つもの |
| ウ | きちんと整理されたもの |
| エ | 誰にでも通用するもの |
| オ | 自在に使いこなせるもの |

問五 傍線部Ⅰ「科学的文化と人文的文化の隔絶と対立」とあるが、こうした事態の背景にあったことの説明として明らかな誤りを含むものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 学問の世界において、博物学的な総合知に重きが置かれなくなり、専門分化が広がった。
- イ 科学技術が、神に対する信仰とは無関係な、日常生活に役立つものへと変化した。
- ウ 機械技術のすばらしさが示されたことに続き、科学理論の有効性が認識されるようになった。
- エ 科学技術が急速に発達したことで、工業化と生産システムに革命がもたらされた。
- オ 物心二元論が貫徹されると同時に、「物」に関わる側面がないがしろにされるようになった。

問六 傍線部A「ニュートン」、傍線部B「ゲーテ」、傍線部C「夏目漱石」とあるが、三者についての説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア ニュートンやゲーテの時代の知は総合的なものだったが、夏目漱石が生きた時代には、すでに文系知と理系知は分断されていた。しかし夏目漱石は、相補うような他者との関わりを通じて、ニュートンやゲーテが個人の内部で実現していた文理の融合を実践することができた。

イ 科学の黎明期に生きたニュートンにとって文系知と理系知がはじめからつながっていたのに対し、少し後の時代を生きたゲーテにおいては文理の融合は努力を要するものであった。さらに後の時代を生きた夏目漱石においては、文理の融合は極めて困難なものになっていた。

ウ ニュートンやゲーテが生きた時代では、知そのものの分断がみられず、個人の内部においても文系知と理系知はひとつだったが、ニュートンは理系知、ゲーテは文系知とより強くつながっていた。時代は異なるが、夏目漱石は、ゲーテの系譜に連なる存在だった。

エ 知が分断されていない時代において、ゲーテは文理融合を個人として全うした最後の人物であり、ニュートンはそうしたことを行った最初の人物であった。だが知が分断されてしまった時代において、夏目漱石は、人間関係を通して文理交流を果たした唯一の人物だった。

オ 知がひとつだった時代において、神の存在を証明することを通じて文理の融合に勤しんだニュートンに対して、ゲーテは神への信仰とは無関係に文理の融合を実現した。しかし知が分断されてしまった時代を生きた夏目漱石は、文学的営為を通じて文理融合を実現した。

問七 筆者は「文系知（＝人文学的な知）」と「理系知（＝科学知）」との融合が必要だと主張しているが、それは筆者が現代をどのような時代だと捉えているからか。本文に即して百字以内（句読点や記号も字数に含む）で説明せよ。

問八 筆者の考えに合致するものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア C・P・スノーの論説は、科学的文化と人文的文化の隔絶と対立を指摘したことでは高く評価できるが、話題がイギリス社会で起きている問題に限定されているため、普遍的な意味を持ち得ないものとなっている。

イ 分断された文系知と理系知を再び融合させるためには、ある共通の作品を文理協業によって製作することが必要だが、そのためには、文系知からの歩みよりによる文理の対話を実現させるほかはない。

ウ 現代においては、文理融合の必要性を説く識者がいるだけではなく、大学においては文理連携が実践されており、そこでは評価すべき成果が上がってはいるが、いまだに解決されていない問題も数多く残されている。

エ 普遍的な真理をめぐる理系知と文系知の対照的なありかたからも、文理の対話の困難さがわかるが、無理にでも対話の実現を図るべきであり、焦ってはならないからといって、なりゆきにまかせるわけにはいかない。

オ 現代の科学者は文系の人間の科学に対する無知を嗤い、それに対して文系の人間は居直っているが、両者の対話を実現するためには、まずは理系の人間が科学に無知な文系の人間に対して寛容な態度を見せる必要がある。

国語の問題は次の頁へ続く。

【共通】

次の文章は、坂上弘さかがみひろしの小説「傍人」の一節である。「私」は、悠二、友男という二人の弟との三人兄弟であるが、道子と結婚してからは実家を出て、夫婦だけで暮らしている。これを読んで、後の問に答えよ。(配点 五十点)

私が友男の問題で話を切り出したのは、父が帰ると言い出してからだった。「とにかくぼくには、責任がもてないと思うんですが」私は黙った状態から唐突に、それまでずっと考えていたことを口に出した。

「なるほど、……それじゃ、どうすればいいのかね」

父は引き止められたことがわかって、再び、小肥こぶとりの尻くぽを窪くぼんだ座蒲団ざぶとんにすべりこませた。

「ただ単にぼくは、友男の責任がとれないだろう、といっているんですよ」私は父の質問を無視して繰り返した。

「お前のところがだめなら、差し当って、それじゃ、あれをどこかに下宿させるか」

なんとぼかげ気たことを、と私は最初に思った。父にそんな考えをおこさせているのは事実弟や私なのだろうか、と私は暗然あんぜんとした。

「なぜなんだろうなあ、なぜどうすればいいか、ということしか考えないんですか」私は悲鳴のような声をあげた。

友男が戻りたくないのは、悠二と喧嘩けんかしたからだし、父なら、この二人のどちらかに味方してやることができるはずだ。私は父にこのことも問い糺あしてみたかった。

「ほかに方法がないわけじゃないでしょう」

「お前に、どうしたらいいか意見があったら、きかせて欲しい」

「ぼくはあれこれ言える立場じゃありません」

「どうしてだね」父は落窪おちくぼんだ眼をひらいて私に向き直っていた。私は返答きゆうたうに窮きゆうした。

「言いたくないからです」とだけ私は言った。

これには父も、いまいましそうに黙ってしまった。しかし私は自分が臆病な肉親嫌いだからと言いかえてもよいと思った。兄弟の中で、父や私に一番憎しみをもっているのは悠二だった。私はその原因が父にあると思っている。従って父に荷担して悠二を責めたくないのだ。私たちは破片のようにばらばらだ、もっと遠く散らばれ、もっと遠く、と私はその時最後の念願のように心の中で呟いた。^{つぶや}

「もし、おとうさんが考え、それから他の人たちの意見もあるでしょうが、そのうえでどうすればいいかわからないのでしたら、ぼくの所に連れて来るといい方法はないんでしょうがね」私はもう父と話すことがないとあきらめたときそう言った。「誰にきけばいい。担任の先生には話したよ、そうしたらまずお前のところに来させて、それから家に戻るのがよいと言う」父の声には明らかに私を説き伏せた安堵^{あんど}が含まれていた。

「おかあさんはどう考えているんです」私は弟を私のところに連れて来るのを母が知らないとなると厄介^{やっかい}なことになると、と思ってきた。

「あれは何も考えなどないさ。もともと母親がしっかりしてくれればこうした問題は起らないよ。三十年間一緒に暮らしてきていながら、妙なものだ」

私はこのとき、父と話したことで初めて顔を覆いたくなるような羞恥をおぼえた。

父が帰ったあと、道子は、

「おとうさんで随分、勝手なところがあるわね」

と父のこちらの都合を無視した提案を非難がましく言ったが、私は彼女に賛成も反対もできない程疲れきった気分だった。

私は父の口について出た三十年間という、荒々しく、短く、もどかしいひびきをもった言葉をもう一度考えていた。

父と母がお互いの間隔を拡張はじめたのはいつだったろう。二人が、頑^{かた}な葛藤^{かた}を強いられた子供のようにお互いを責めあっているのは、中学生になった頃からよく見掛けた。それ以前の父や母という勿論^{もちろん}私は直接覚えていたとは言い難^{がた}かった。ただ

いつだったか、人形のように並んだ若い頃の二人を、薄茶色に変色した卵形の写真で見たことがある。晩婚の父が結婚当初よくピクニックや観劇などに連れて行ってくれたと母は話していた。その母の口振りには父をからかつてはいても、おぞましく感じていたところはなかった。

この母のことを考えていると、私はふと母のおかしな言葉を思い出した。

私がまだ学生の頃、Y町の伯父^{おじ}が泊^{とま}っていき、母に頼まれて悠二に説教して行ったときのことだ。伯父が帰ったあとで、母はどう思ったのか気負いたって悠二に再び説教しはじめた。弟は母親のくどくどした話に、受け流すような返事をしていた。母のお説教というのはまるで自分を責めているみたいになった。それが一時間以上も続いてやっと済んだあと、私が自分の部屋から出て洗面所に行くと、母が、真赤になった顔をごしごし洗っていた。そのとき、ああもうあたしにはとんでもできないわ、できないわ、と呟^{ささや}いていた。父が怒ったように、襖^{ふすま}越しに、これからは子供のことをもっと注意して見ていなくちゃだめだ、と母に言ったが、母はその父と喋^{しゃべ}っているのではなかったのだ。洗面所の鏡の中に、母は妙に赧^{あか}らんだ自分の顔を映していた。

私はそのときの『ああもうできないわ』を呟^{ささや}いてみた。するとそれは、吐息^{といき}のように思考をなげ出す効果があった。父の言おうとしていた母の姿とは、あのときの母のように、本当の自分を、何もないところに置いて、異様な微笑^{ほほえ}を洩^もらしている姿のこ
とではないだろうか。

¹
父の来た日から数えて、中学生の弟の夏休みはもうすぐだった。先方の家では休みに入る前に弟を引き取るように望んでいた。私は弟を連れに行く時の打ち合わせをするために、父の家に寄った。父が来た日以来、私は父と無闇に対立していた時期が、父の内部でも終わっているのを知った。父は私を仲間に入れようとして私の前に現われた。父が意識しているにせよ、いないにせよ、その父の考えに、私は、ずるさが含まれていると思うことで納得した。

庭から見る座敷の電燈^{でんとう}に夏の虫が舞いはじめた夕方だった。

「友男を連れに行ったら、先方には、どうお礼を言ってきましたようか」私は訊^きいた。本来なら父が行くべきだと私は思ってい

た。

「うん」父は面倒臭がつているように言った。「おかあさんと相談してくれ。でもお前からはいずれ親が挨拶にうかがうからと言っておけばいい」その父の口調を、私は妙に冷淡だと感じた。そして父の、私に頼んでおきながらそのことに関心を失ったようなその日の態度に、理由があったのを、私は後になって知った。

それから私は上の弟の悠二に会うために座敷に上った。その部屋に行く廊下で、私は妙な光景にぶつかった。便所から出てくる弟の後ろから、母が子供の電車ごっこのように、弟の腰を支えるようにしてやってきたのだ。

私はその母の前で弟に高飛車に小言を言うのを止め、

「お前に話があるが、どうした」と訊いた。

「うん、少し頭が痛い」弟は大人っぽく骨太になった肩をまるめて神妙に答えた。

「それだけかい」私は頭痛が弟の私を避ける口実のように思い、殊更^{とてつ}突慥貪^{つげんどん}に言った。

「ああ痛い痛い」

弟が私の訊く事など無視して言うので、私は尚更腹立たしく思った。しかし、「それならいい。おまえが頭が痛くても、友男となんか喧嘩するんじゃないぞ」と釘^{くぎ}をAした。

「今日は悠二は頭が痛いつて言うのよ、お前。またにしなさい」母は弟の後ろから覗くように私を見た。母の手はまだ弟の尻を押すようにしていた。私にはその触れ合いが眼に痛いように感じられた。母の眼はおどおどした、子供を甘やかしているのを見咎^{とが}められた眼だった。

帰るときになって、母は、玄関で私に、悠二がこの頃急に具合が悪くて、先日便所で原因もわからずにひっくり返ったというので、それ以来後ろからついてやっているのだ、と弁解がましく説明した。

「甘やかすのを見ちゃいられませんよ」私は母にだけは憎々し気に乱暴な口がきけた。その際に母が私に黙っていたことを、私は数日後に、上京したY町の伯父の口から聞かされることになった。

伯父はきき慣れない足音をひびかせて大きな図^c体をアパートの入口にあらわした。父も一緒だった。

私はこの二人の似かよった初老の男たちと身を近づけると、温もりに身を包まれたようで気恥かしかった。

「いろいろ世話を掛け、えらい済まんのう」

伯父の切り出し方には、私は可笑^{おか}しいというより、戸惑いを覚えさせられた。伯父は父に替って私に、友男のことについて謝意を述べているのだった。

「まあ悠二君も、今迄^{まで}はわたしの言うことはあまり聞かない方だったな。しかし今度は少し事情がちがうので、こうして、お前のところに話に来たのさ」

私は伯父の言う内容を正確にわからずに、ただ、ええと返事をした。

「今度、兄さんであるお前の意見もきいておきたいのは、悠二君が、手術せにやらんことについてだ」伯父は言った。

「何の手術です？」私は訳がわからずに、父の方を見た。その父に替って、伯父は、

「つまりこの前精密検査でわかったんだが、悠二君の頭痛の原因に腫物^{はれもの}ができてるといふんだ」と広い額^{ひたい}の上の方を、こつこつ叩いた。

「それにこれは手術せにや直らんし、放っておくと命取りになるということだな。手術と言うと、これは、わたしの考えでは医学がいかに進んだとはいえ、後のことは保証できんということがある。手術にはおかあさんは猛反対している。そりゃ心配なのだから無理もないがのう」

伯父がこういう話をわざわざ私にしに来たのは、父が頼んだからだろうかと私は思った。

「そこで」遍^{いっぺん}お前の方の意見もききたいと思ひましてな。もちろん、遠慮なくきかせて欲しい」

遠慮なく、と言われても、私はなんと答えてよいかわからなかった。父を前にしては尚更言葉がなかった。父は、悠二の病状がこの夏に入るところから急に顕著になって、あまり[B]に落ちない行動ができたので病院に連れて行ったのだと説明した。母

が無闇に手術に反対しているので入院の時期も決まっていなかった。

「それは大手術になるんでしょうね……」私は口ごもらざるを得なかった。

「それでは、よいですな。わしやおとうさんに、悠二君のことは、まかせてもらえますな」

伯父の言う、弟の奇禍きかについて、長兄としての私の意向をただしておきたい、という旧弊きゅうへいな考えに、私は血の気が引くような思いをした。そのうえ、伯父の、まかせる、という言葉に、父は何も口を挟はさまなかった。私は二度三度伯父から念を押され、わからないまま頷うなずいた。

末の弟を下町の友達の家に迎えに行く日にも、悠二の手術の日取りは決まらなかった。

友男が泊めてもらっていた家は、下町にあり、家全体が町工場になっていて、鉄屑くずや塗料の臭いがしていた。友男は大型の不似合なボストンバッグと、ナップザックに自分の荷物をつめて現われた。

事情をきいても、友男は機械的に返事をするだけだった。道子が声を優しくして話かけると殊更無口になった。私にも、この傍らかたわにいる末の弟に、父や母とちがった言葉で、なんと呼びかけてよいのかわからなかった。タクシーの中から夏の夜の街を見廻まわしている弟が、私には、こわれやすい、小さな荷物のような気がした。

不意に私は、いま自分が思いをこらしているのは、弟達や父のことではないのに気づいた。それは自分自身の生あたたかい固まりとなった恐怖なのだ。しかしそれを消し去りたいとは思わない。その反対にいつまでも育てていきたいのだ。その方がぬくぬくと暖い。これからも、どんな人々の間で繋つながりをもつにしても、この温もりは感じとれるにちがいない、と思った。

問一 波線部 a ～ c の漢字の読みを、ひらがなで答えよ。

問二 傍線部X・Yを言い換えたものとして最も適当なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

X 高飛車に

- ア 頭ごなしに威圧的な態度で
イ 乱暴な口調で一方的に
ウ 怒りにまかせてなじるように
エ 無理に虚勢を張るようにして
オ 憤りも露わに高圧的な物腰で

Y 突慥貪に

- ア とげとげしく無愛想に
イ 感情を抑えて言葉少なに
ウ 感情を交えず淡々と
エ あえて不満げな口調で
オ 相手に対しておもねるように

問三 空欄A・Bに入れるのに最も適当なひらがな一字を、それぞれ答えよ。

問四 傍線部1「父の来た日」とあるが、その日の「私」についての説明として、明らかな誤りを含むものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 父が「私」のもとを訪れたのは、家を出てしまった友男のことで話があったからだが、事態を收拾することばかりを考えているらしい父に対し、「私」は反発を感じるところがあった。

イ 友男のことを自分に押しつけようとしているように見受けられる父を前に、「私」は釈然としない思いを抱いていたが、最終的には、父に対して「私」のほうが折れざるを得なかった。

ウ 友男が家に戻りたがらないのは悠二のせいだったが、「私」は友男の家出したそもその原因が父にあると思っているため、悠二を責める言葉を口にするかわりに父の責任を問題にした。

エ 「私」にとって父の来訪は、その目的からして決して単純に歓迎できるようなものではなかったが、「私」には、妻である道子も義父の申し出に納得していないように感じられた。

オ 「私」のもとに父がやってきたのは、友男の件に「私」をまきこもうと目論^{もくろ}んだからだ。「私」には思われたが、「私」にとってそうした父のやり方はずるさを感じさせるものだった。

問五 傍線部2「父の、私に頼んでおきながらそのことに関心を失ったようなその日の態度に、理由があったのを、私は後になつて知った」とあるが、「私」が「理由」を知ったのは、どのような出来事があったからか。その出来事を六十字以内（句読点や記号も字数に含む）で説明せよ。

問六 「母」に対する「私」のありかたを説明したものとして最も適當なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 父が母を軽んじていることの影響から、ついあなどるような態度をとってしまうこともあったが、その実、母の意向をできるだけ尊重しようとするところからも明らかのように、母の気持ちを絶えず気にかけていた。

イ 悠二だけを誰はばかることなく溺愛していることに対して、苦々しく思うこともあったが、そうした母の態度が、満たされることのない父との関係に起因することを知ってからは、不憫^{ふびん}に思っていた。

ウ 時として自ら考えることをなげ出しているようにも見える母をどこか不可解に思うときもあったが、子供には甘い一面をもつ母に甘える気持ちがあつてか、母に対してはぞんざいな口をきくことができた。

エ 若い頃には仲むつまじかった父との関係が、次第に陰悪なものになってしまったことを氣に病む母のために、なんとかしてあげたいと思いつつも、どうすることもできない自分の不甲斐^{ふがひ}なさを痛感していた。

オ 肉親を嫌う傾向をもつにもかかわらず、母に対してだけは一貫して親身な感情を有していたが、そうした自分の思いが当の母親にはうまく伝わっていないことに対して焦るような思いを感じることもあった。

問七 本文の表現・内容についての説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 三人兄弟の長男である「私」が、父の来訪をきっかけとして、長男としての役割と責任に目覚めていくまでの経緯が、心温まる家族のエピソードを交えつつ鮮やかに描き出されている。

イ 「私」は、すぐ下の弟に対しては冷ややかにふるまう一方、歳の離れた末弟に対しては、うるさいほど干渉しがちであるが、そうした「私」のありかたが、作品に奥行きを与えている。

ウ 父と母との長年にわたる不和が原因で、家族がばらばらになってしまったことに対する兄弟一人一人の思いが、そうした事態に人一倍心を痛めている「私」の視点から描かれている。

エ 「私」は、肉親嫌いという感情を抱えもつ人物として造形されているが、そうした感情は単なる憎悪や嫌悪ではなく、濃密なつながりをもつがゆえのいわく言い難い特別な思いとして描かれている。

オ 「私」のもとへの父の来訪、実家への「私」の訪問、伯父を伴っての父の再訪という物語の筋立てによって、「私」をとりまく家族の問題が徐々に解決に向かっていくことが暗示されている。

【共通】

次の文章を読んで、後の問に答えよ。(配点 五十点)

わが父の若くおはせしほどは、戦国の時を去ること **b** 遠し、世の人、遊侠を事として、気節を尚ぶならはし、今の時には異なることも多く聞こえたりけり。

わが父にておはせし人も、東走西奔、その蹤跡定まれることもなくして、年を経給ひしうちに、三十一歳の時に、民部少輔源利直の家に出でて仕へられし初めに、歩行の侍の夜討ちしたりと聞こえし者三人ありて、召し捕らへつつ、門の櫓の上に押し込めしを、わが父一人に預けらる。このよしを承りて、「かの輩を某に預けられ候はむには、さだめて刀脇差をば取られずこそ候はむずれ」と申さる。申すところ聞こしめされぬとて、彼らが刀脇差をば、わが父にて候ひし人に給うだりけり。それを持たせて、櫓の上にのぼりて、三人の者に返し与へて、「わぬしら、逃げて行かむと思はば、わが首斬りて行け。われ一人、わぬしら三人に敵すべきにもあらず。さらば、みづからの刀脇差、不用の物なり」とて、三尺手拭にて束ね結びて投げ捨て、かれらと同じく起臥し、ものうち食ひて、日十日ばかりが後に、かれらが夜討ちせしと聞こえしは、あらぬことなるよし定まりしかど、かかる者召し使ふべきにあらずとて、戸部の家をば出だされけり。

その時に及びて、かれら、わが父にいひしは、「われら、いかにいひがひなき者どもと思ひ給ひぬれば、ただ一人に召し預けられたりけむ。思ひ知らせ参らせむものと思ひしかど、わぬしが刀脇差をだに帶せずしてあるを、殺したらむには、果たしていひがひなしと思ひ給はむことのくやしければ、『このままに死しなむは力なし。幸ひに命生きたらましかば、その時にこそ恨みをば報いむずるやうあり』と思ひしに、わぬしが情けによりて、刀脇差取り放されずして、再び武士の中に立ち交じるべき身ともなりぬ。この情け忘るべからずと思へば、今は恨みも晴れし心地するなり」といひて、別れしと語り給ひき。

その後、いくほどなくして、ぬきんでて用ゐられ給ひしかば、つひに戸部の家にとどまり仕へ給ひたりき。

(新井白石『折たく柴の記』)

(注) 1 遊侠……強きをくじき弱きを助けること。 2 気節……気骨。 3 蹤跡……居所。 4 歩行の侍……徒歩で行列の先導を務める武士。

5 夜討ち……夜に人家を襲って盗みをする事。 6 戸部……民部少輔源利直のこと。

問一 波線部 a「おはせ」・c「経」・d「あり」・e「報い」・f「用ゐ」について、次の各問に答えよ。

(1) それぞれ終止形に改めて記せ。(すべてひらがなで記すこと。)

(2) 活用の種類を、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。(同じ記号をくりかえし用いてもよい。)

ア 四段活用 イ 上一段活用 ウ 上二段活用 エ 下一段活用 オ 下二段活用
カ 力行変格活用 キ サ行変格活用 ク ナ行変格活用 ケ ラ行変格活用

問二 b 遠し を適切な形(終止形も含む)に活用させて記せ。

問三 傍線部 1・3・6 の意味として最も適当なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

1 「さだめて」

ア いつも イ たぶん ウ かならず エ できれば

3 「あらぬことなる」

ア 不思議だ イ 無分別だ ウ 言語道断だ エ 事実無根だ

6 「力なし」

ア だらしない イ もったいない ウ 意味がない エ 仕方がない

問四 傍線部2「申すところ聞こしめされぬ」について、次の各問に答えよ。

(1) 「申すところ」とは、どのようなことか。三十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

(2) 「聞こしめされぬ」の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 歩行の侍三人が承諾した。

イ 民部少輔源利直が承諾した。

ウ 歩行の侍三人は承諾しなかった。

エ 民部少輔源利直は承諾しなかった。

問五 傍線部4「かかる者」は誰を指すか。最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 作者 イ 作者の父 ウ 民部少輔源利直 エ 歩行の侍三人

問六 傍線部5「思ひ知らせ参らせむものを」とあるが、誰が、どのようなことを思ったのか。最も適当なものを、次の中から

一つ選び、記号で答えよ。

ア 民部少輔源利直が、作者の父に、誠実に仕えることの大切さをはっきり悟らせてやりたいと思った。

イ 民部少輔源利直が、歩行の侍三人に、誠実に仕えることの大切さをはっきり悟らせてやりたいと思った。

ウ 歩行の侍三人が、作者の父に、自分たちが見下げられるような者ではないとはっきり悟らせてやりたいと思った。

エ 歩行の侍三人が、民部少輔源利直に、自分たちが見下げられるような者ではないとはっきり悟らせてやりたいと思った。

問七 傍線部7「今は恨みも晴れし心地するなり」とあるが、歩行の侍三人は、なぜこのように述べたのか。四十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

四【現・古・漢型】

次の文章を読んで、後の問に答えよ。（設問の都合で返り点・送り仮名を省略したところがある。）（配点 四十点）

楊序夢^{ミル}神^ヲ人^一。曰^ク、「子^コ逾^{ユレ}旬^ヲ当^レ死^ス。若能^{モシ}活^{カサバ}億^ノ万^ヲ命^ヲ、可^{シトル}免^ル。」序曰^ク、「大期

既^ニ迫^ル。豈^ア易^{カラント}満^{タシ}数^{スウヲ}。」神曰^ク、「道書^ニ云^フ、『魚卵^ニ不^{シテ}經^ニ塩漬^{シトビ}者^一、三年^ニ当^レ可^{シトル}再^ビ活^イ。』

曷^{なんゾ}不^{ルト}図^ラ之^ヲ。」序於^ニ是^ニ大^ス書^ス神語^ヲ於^ニ衢^{ヘキ}壁^ノ間^ニ。由^{リテ}是^ニ人^ニ皆^ニ以^テ為^レ戒^ス。見^{レバ}人^ノ殺^ス魚^ヲ、

即^{ヒテ}從^{リテ}取^ヲ卵^ヲ投^ズ之^ヲ江^ニ中^一。為^{ナス}是^ニ月^ヲ余^{ニシテ}、復^タ夢^{ミル}神^ヲ人^一。曰^ク、「億^{ニシテ}万^ノ之^ノ数^ヲ已^ニ是^ニ過^グ満^{ツル}。」

寿^{シト}可^フ延^ブ矣^{ニシテ}。」既^{ニシテ}而^{シテ}果^リ然^リ。

（『湖海新聞夷堅統志』による）

（注） ○楊序……人名。 ○神人……ここでは、神のこと。 ○旬……十日間。 ○億万……何億何万。 数や量がきわめて多いこと。

○大期……死期。 ○道書……道教の教義を記した書物。 ○衢壁間……大通りに面した壁。

問一 傍線部 a 「能」・ b 「於是」・ c 「即」の読みを、送り仮名も含めてすべて平仮名で記せ。（現代仮名遣いでもよい。）

問二 傍線部 1 「当_レ死」・ 5 「以_レ為_レ戒」を書き下し文に改めよ。

問三 傍線部 2 「豈易_レ満_レ数」を現代語訳せよ。

問四 傍線部 3 「魚卵 不_レ経 塩 漬 者」は、「魚卵の塩漬を経ざる者は」と読む。この読み方に従って、解答欄の原文に返り点を施せ。（送り仮名は不要。）

問五 傍線部 4 「曷 不_レ図_レ之」は「このことを考慮してはどうか」という意味であるが、結局、神は楊序にどのようなことを示唆したのか。最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 一度に多くの命を救うには塩漬けにしていない魚卵に着目すればよい。

イ 塩漬けになっていない魚卵を手に入れてたくさんの人命を救いなさい。

ウ 自分の命を長らえるには魚卵を三年の間塩漬けにして食料難に備えればよい。

エ 長生きをしたいのなら三年間は塩漬けにしていない魚卵を食べ続けなさい。

オ 魚を絶滅から救うには魚卵を塩漬けせずに蓄えるよう人々に伝えるのがよい。

問六 本文の内容に合致するものとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 楊序は神の言葉を誤解したために、神からさらに試練を与えられた。
- イ 楊序は夢で見た神のお告げを世に伝えて、多くの人々の命を救った。
- ウ 楊序は人が捨てた魚卵を大量に蓄えたために、難を免れ生き延びた。
- エ 楊序は神の言葉の真意を悟り行動し続けたために、死なずにすんだ。
- オ 楊序は神の命令をやり遂げられずに、少し期限を延ばしてもらった。

国語の問題は次の頁へ続く。

【五】現・古型

次の文章を読んで、後の問に答えよ。(配点 四十点)

今は昔、清滝川の奥に、柴の庵造りておこなふ僧ありけり。水ほしき時は、水瓶を飛ばして、汲みにやりて飲みけり。年経にければ、かばかりの行者はあらじと、時々慢心おこりけり。

かかりける程に、わがゐたる上さまより、水瓶来て、水を汲む。いかなる者の、またかくはするやらむと、そねましく覚えければ、見あらはさむと思ふ程に、例の水瓶飛び来て、水を汲みて行く。その時、水瓶に付きて行きて見るに、水上に五六十町のぼりて、庵見ゆ。行きて見れば、三間ばかりなる庵あり。持仏堂、別にいみじく造りたり。まことにいみじうたふとし。ものきよく住まひたり。庵に橋の木あり。木の下に行道したる跡あり。関伽棚の下に、花がら多く積もれり。砌に苔むしたり。神さびたること限りなし。窓のひまよりのぞけば、机に経多く、巻きさしたるなどあり。不断香の煙満ちたり。よく見れば、歳七八十ばかりなる僧のたふとげなる、五銖を握り、脇息に押しかかりて、眠りゐたり。

この聖を試みむと思ひて、やはら寄りて、火界咒をもちて加持す。火焰にはかにおこりて庵に付く。聖、眠りながら散杖を取りて、香水にさし浸して、四方にそそく。その時、庵の火は消えて、わが衣に火付きて、ただ焼きに焼く。下の聖、大声を放ちてまどふ時に、上の聖、目を見上げて、散杖を持ちて、下の聖の頭にそそく。その時、火消えぬ。

上の聖のいはく、「何料にかかる目をば見るぞ」と問ふ。答へていはく、「これは年ごろ、川の面に庵を結びて、行ひ候ふ修行者にて候ふ。この程、水瓶の来て、水を汲み候ひつる時に、いかなる人のおはしますぞと思ひ候ひて、見あらはし奉らむとて参りたり。ちと試み奉らむとて、加持しつるなり。御許し候へ。今日よりは御弟子になりて仕へ侍らむ」といふに、聖、人は何事いふぞとも思はぬげにてありけりとぞ。

下の聖、わればかりたふとき者はあらじと、驕慢の心ありければ、仏の憎みて、優る聖をまうけて、あはせられけるなり、とぞ語り伝へたる。

(注)

- 1 五六十町……「一町」は約一〇九メートル。
- 2 三間ばかりなる庵……三間四方ほどの庵室。「間」は柱と柱の間をいう。
- 3 持仏堂……自分の信仰する仏像を安置する御堂。
- 4 行道……経を読みながらめぐり歩くこと。
- 5 關伽棚……仏前に供える水や花などを置く棚。
- 6 花がら……萎れた花。
- 7 砌……軒下の石。
- 8 不断香……絶え間なく焚き続けている香。
- 9 五鉢……密教で用いる仏具の一つで、煩惱を打ち碎くとされる。
- 10 火界咒……火焰を生じさせるための不動明王の呪文。
- 11 加持……密教の祈禱法。
- 12 散杖……密教の祈禱の時に、水を壇や供物に注ぐのに用いる棒。
- 13 香水……密教の祈禱の時に使う、香を溶かした水。
- 14 何料に……何のために。

問一 傍線部1・4・5の意味として最も適当なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

1 「おこなふ」

ア 行動する イ 修行する ウ 生活する エ 奉仕する

4 「いみじく」

ア 質素に イ 清潔に ウ 派手に エ 立派に

5 「やはら」

ア 急に イ 強引に ウ 静かに エ 親しげに

問二 傍線部2「かばかりの行者」とほぼ同内容の表現を、本文中から十字程度で抜き出して記せ。

問三 傍線部3「見あらはさむと思ふ」とあるが、誰が、どのように思ったのか。三十字以内（句読点等を含む）で説明せよ。

問四 傍線部6「人は何事いふぞとも思はぬげにてありけり」は、「上の聖」のどのような様子を示しているか。最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 驚愕きょうがくした様子

イ 警戒している様子

ウ 超然とした様子

エ 不審に思う様子

問五 波線部a～dの「の」のうち、文法的はたらきの相違するものを一つ選び、記号で答えよ。

問六 この話に込められた教訓として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 自分に能力があっても、自信過剰になつてはいけない。

イ 自分の能力と他人の能力とを比べたりしてはいけない。

ウ すぐれた能力を、人を害することに使用してはいけない。

エ 仏罰を受けたくなければ、人の能力を試してはいけない。

© Kawaijuku 2014 Printed in Japan

無断転載複写禁止・譲渡禁止